

演題 咬合調整の少ないクラウン

遊亀裕一（山手デンタルアート）

《抄録》

我々、歯科技工士は間接法でクラウンを作製しています。現在では、印象材や模型材等の進歩と各作業行程における術式の見直しなどから、制度の高いクラウン作製が可能となりました。

ところが、作業模型上では上下残存歯と同じ高さに作ったクラウンが、咬合調整により隆線がなくなるほど削除されることがあります。

間接法で作製されたクラウンは、200~300 ミクロン咬合が高くなると言われていています。

高くなる要因として、1.人為的な問題 2.材料の問題 3.生体の問題が考えられます。

これらの要因が少しでも増加すると、咬合調整に多くの時間が必要になります。

今回は、咬合調整を行う歯科医師に負担を掛けず、そして、咬合接触点が点接触になることで、支台歯と対合歯にも過重負担を掛けない、そのような咬合調整の少ないクラウンを目指すには、どのようにしたら良いのか、臨床例を提示しながら述べたいと思います。

皆様の明日の臨床技工にお役に立てれば幸いです。

略歴

1997年 日本大学歯学部附属歯科技工専門学校卒業

1988年 横浜市にて（有）山手デンタルアート開業

2006年 明倫短期大学臨床教授就任（現在に至る）

2010年 全国歯科技工士学校教員協議会 研修講師

2008年~2011年 日本メディカルマテリアル（現京セラメディカル）開発アドバイザー

現在 GC セミナー講師、日本歯科色彩学会評議員、日本歯科審美学会会員、日本顎咬合学会会員、日本臨床歯科補綴学会会員、Wクリック会員、JDA 正学会員

主な執筆

- ・ラボサイドへの情報伝達～いかに補綴のイメージを共有するか～（共著）歯界展望 2003年 10月
- ・補綴主導型インプラントとその技工（共著）QDT 別冊 YEAR BOOK 2003年
- ・咬合調整の少ないクラウンの作り方 デンタルダイヤモンド 2003年 11,12月
- ・デジタル画像により様変わりする歯科技工士への情報伝達（共著）日本歯科評論 2004年 5月
- ・前歯部歯冠修復における「レジンガム」応用テクニック 日本歯科評論 2005年 9,10月
- ・みんなでいっしょに歯周補綴（共著）歯界展望 2008年 4,5,6月
- ・FUNDAMENTALS of Esthetic Dental Technology 審美歯科技工の原理原則（共著）歯科技工別冊 2009年
- ・診療室・技工室から補綴臨床を考える（共著）株式会社ジーシー 2010年 1月
- ・キャストブルゴールドアバットメントの技工操作 Japan Medical Materials 2010年 4月